

英語と獨逸語

1

獨逸語と英語とは元來おなじ系統(ゲルマン系)に屬する國語ですから、基礎單語はみなよく似ています。(ただ英語の方は、全然系統のちがうラテン系統の語がたくさん基礎單語にはいつているから、それは別です。たとえば「非常に」を英語では *very* といい、ドイツ語では *sehr*「ゼール」というとか、一時間は英は *hour*, 獨は *Stunde*「シュトゥンデ」というなんてのは、これは英語の方がラテン系語ですから、全然似ていない筈です)。

英の *in* が獨でも *in*, 英の *gold* は獨でも *Gold* [ゴルト], 英の *fish* が獨でも *Fisch* なんてのは、これは改めて申すまでもありますまい。

知識として重要なのは、よく似ていて少しちがう場合です。*fish* の *sh* と *Fisch* の *sch* ぐらいは氣がついたところで大しておもしろくもありませんが、氣がつくと大變おもしろくなつて、しよつちゆう注意するようになり、注意するようになると注意のおかげで單語がよく頭に這入るという、多くの語に共通な一般法則というものが多少あります。それを紹介して、英獨兩語に關する單語の知識を補強しましょう。

まず第一則：語頭ではなく、語末あるいは語中の英語の *i* は、ドイツ語では「ス」の音(即ち *ss* か *s* かのどちらか)になる：

英 語	獨逸語	
<i>water</i>	<i>Wasser</i>	水
<i>better</i>	<i>besser</i>	より良き
<i>white</i>	<i>weiß</i>	白い
<i>sweet</i>	<i>süß</i>	甘い
<i>sweat</i>	<i>Schweiß</i>	汗
<i>foot</i>	<i>Fuß</i> [フース]	足
<i>nut</i>	<i>Nuß</i> [ヌス]	胡桃
<i>bite</i>	<i>beißen</i>	噛む
<i>eat</i>	<i>essen</i>	食う
<i>hate</i>	<i>hassen</i>	憎む
<i>let</i>	<i>lassen</i>	…せしめる
<i>greet</i>	<i>grüßen</i>	挨拶する
<i>great</i>	<i>groß</i>	大きな
<i>hot</i>	<i>heiß</i>	熱い

もつとも、歴史的な關係をよく知らない人は、*hot* と *heiß* とが同語であるなどと聞か

されると、何だかこじつけみたいな気がするかも知れません。似ているのはただ h だけで、あとはみんな似てもつかない別物ですからね。しかし、これから紹介する法則がわかってくると *hot* と *heiß* とはなるほど同一物だということが段々うなづけるようになります。(英の o は獨の ei なのです, *stone* が Stein [石], *one* が ein, *holy* が heilig, *two* が *zwei* など、いずれ後で紹介します。)

sweet が süß (ee=ü) というのも *green* が grün, *greet* が grüßen なのでわかりましょう。また實際 u の發音は、ユーというよりはむしろ ee に近いのです (即ちイーにです)。

2

はじめてドイツ語を學ぶ人が誰でもすぐに氣づくのは、英語の定冠詞 *the* がドイツ語では *der, die, das* となっており, *this* を *dies-* といい, *that* を *das* と云い, *then* が *dann* となつてゐるなど、どこを見ても英語の *th* が、ドイツ語では *d* となつてゐるという現象です。こうした子音と子音との關係は、單語をおぼえる上に非常に重要ですから、ここしばらくは主として子音の法則を研究することにします。まづいちばん有名な *th* 對 *d* の關係から片づけます。

(母音に關する法則の方は、子音が一應終つた頃にやります、この方はかなり單語の知識が豊富にならないうちにはなかなか納得できないのです。ですから此の英獨比較欄は、前後を比較して、系統的に御研究下さることを希望いたします。)

英	獨	英	獨
<i>brother</i>	Bruder, m. 兄弟 ブルーデル	<i>path</i>	Pfad, m. 小徑 ファート
<i>think</i>	denken 考える デンケン	<i>thunder</i>	Donner, m. 雷 ドンネル
<i>thank</i>	danken 感謝する ダンケン	<i>thing</i>	Ding, n. 物 ディンク
<i>three</i>	drei 3 ドライ	<i>thumb</i>	Daumen, m. 拇指 ダオメン
<i>thou</i>	du 汝 ドー	<i>thistle</i>	Distel, f. あざみ ディステル
<i>South</i>	Süd, m. 南 ズュート	<i>thirst</i>	Durst, m. 喉の渇き ドルスト
<i>North</i>	Nord, m. 北 ノルト	<i>bath</i>	Bad, n. 沐浴 バート
<i>earth</i>	Erde, f. 地 エールデ	<i>oath</i>	Eid, m. 誓約 アイト
<i>thief</i>	Dieb, m. 盜人 ディーブ	<i>thick</i>	dick 厚い ディック
<i>death</i>	Tod, m. 死 トート	<i>thin</i>	dünn 薄い デュン
<i>thorn</i>	Dorn, m. 棘(とげ) ドルン	<i>clothes</i>	Kleid, n. 着物 クライト

heath Heide, f. 荒野
ハイデ

feather Feder f. 羽毛
フェーデル

3

英語には、しきりに *gh* という複合子音があらわれますが、これは獨逸語の *ch* に相當します。英語の *gh* は、大抵はサイレント、たまに *f* と同じく發音する語があります。獨逸語の *ch* はサイレントになることはありません。

英	獨		英	獨	
high	hoch ホーホ	高い(ホホに非ず)	neighbor	Nachbar ナハバール	隣人
through	durch ドウルヒ	……を通じて	laugh	lachen ラッヘン	笑う
though	doch ドホ	それにも拘らず			

殊に *ght=cht* の關係が多く見うけられます：

eight	acht アハト	8	freight	Fracht フラハト	積荷
night	Nacht ナハト	夜	I thought	Ich dachte イヒ ダハテ	私は考えた
light	Licht リヒト	光	I brought	Ich brachte ブラハテ	私は持ってきた
light	leicht ライヒト	軽い	tight	dicht ディヒト	隙のない、密な
right	recht レヒト	右の	daughter	Tochter トホテル	娘
fight	fechten フェヒテン	闘う	knight	Knecht ケネヒト	臣僕、奴隸
sight	Sicht ジヒト	視野	weight	Gewicht ゲヴィヒト	重量
flight	Flucht フルフト	逃亡		[Wucht ヴフト	重壓]
might	Macht マハト	勢力	fright	Furcht フルヒト	恐怖

意味はかならずしもピタッとは一致しません。英語では立派な武者を意味する語がドイツ語では奴隸であつたりします(その反對は英の *knave* [惡漢] と獨の *Knabe* [少年], *Knappe* [お小姓] です、この方は英語の方が悪い意味になつてしまつています。)

4

英語の *d* が獨逸語で *t* となることが多いことは、*day* (der Tag) や *do* (tun), *door* (die Tür) などで誰も直ぐ氣のつくことです。これが最も多く認められるのは *day* や *do* のような綴頭の *d* ではなく、次のような綴尾の *d* です：

英	獨		英	獨	
god	Gott, m. ゴット	神	beard	Bart, m. バルト	鬚
bed	Bett, n. ベット	寢床	garden	Garten, m. ガルテン	庭
good	gut グート	良い	ladder	Leiter, f. ライテル	梯子
word	Wort, n. ヴォルト	言葉	leader	Leiter, m. ライテル	指導者
world	Welt, f. ヴェルト	世界	glide	gleiten グライテン	滑る
old	alt アルト	古い	ride	reiten ライテン	騎る
cold	kalt カルト	寒い	bride	Braut, f. ブラウト	新婦, 花嫁
loud	laut ラウト	高聲の	hard	hart ハルト	固き
wide	weit ヴァイト	廣い	dead	tot トート	死せる
under	unter ウンテル	下	red	rot ロート	赤き
blood	Blut, n. ブルート	血	spade	Spaten シュパーテン	シャベル
bread	Brot ブロート	パン	dear	teuer トイエル	高價な
broad	breit ブライト	幅の廣い	seldom	selten ゼルテン	稀に
sword	Schwert, n. シュヴェールト	劍			

5

綴りのあとの方に来る（即ち綴尾の）英語の *f* はドイツ語では *b* になります。

英	獨		英	獨	
half	halb ハルブ	半分の	self	selber ゼルベル	自身
calf	Kalb, n. カルブ	仔牛		selbst セルブスト	自身
wife	Weib, n. ヴァイブ	妻	if	ob オッフ	（もしも）…かどうか
deaf	taub タオフ	聾の	off	ab アッフ	（去つて）離れて
staff	Stab, m. シュターブ	棒	life	Leib, m. ライブ	（生命）肉體
loaf	Laib m. ライブ	パン（の全塊）			

「生命」(life) と「肉體」(Leib) とはずいぶん意味が懸けはなれてしまつたように見えますが、兩方とも「生きる」(live, leben) という動詞と關係しています。ドイツ語の

Leib も、古い時代には *life*, すなわち「生涯」「命」の意に用いたことがあるので、いまでも「終身年金」(*Leibrente*) ということばに英語と同じ Leib の意味が残っています。

英語の *f* のみならず、*v* も、綴尾のものは *b* となります。

<i>live</i>	leben レーベン	生きる	<i>over</i>	über ユーベル	…の上方を
<i>love</i>	lieben リーベン	愛する	<i>sieve</i>	Sieb, n. ジーブ	篩(ふるい)
<i>drive</i>	treiben トライベン	驅る	<i>dove</i>	Taube, f. タオベ	鳩
<i>grave</i>	Grab グラブ	墓	<i>liver</i>	Leber, f. レーベル	肝臓
<i>have</i>	haben ハーベン	持つ	<i>fever</i>	Fieber, n. フィーベル	病熱
<i>give</i>	geben ゲーベン	與える	<i>starve</i>	sterben シュテルベン	(餓死する) 死ぬ
<i>seven</i>	sieben ジーベン	7	<i>silver</i>	Silber, n. ジルベル	銀
<i>even</i>	eben エーベン	平らな	<i>harvest</i>	Herbst, m. ヘルブスト	(收穫) 秋

6

英語の綴尾の *k* がドイツ語では *ch* になつている単語がたくさんあります。(綴頭の *k* は獨逸語でも *k* です: *kiss*=*küssen*)

<i>book</i>	Buch, n. ブーフ	本	<i>oak</i>	Eiche, f. アイヒェ	櫟
<i>milk</i>	Milch, f. ミルヒ	乳	<i>dike</i>	Deich m. ダイヒ	堤防
<i>cook</i>	Koch, m. コック	料理人	<i>monk</i>	Mönch, m. モンヒ	僧(修道僧)
<i>lark</i>	Lerche, f. レルヒェ	ひばり	<i>stroke</i>	Streich m. シュトライヒ	一撃
<i>make</i>	machen マッヘン	作る	<i>cake</i>	Kuchen, m. クーヘン	菓子
<i>yoke</i>	Joch ヨック	くびき	<i>seek</i>	suchen ズーヘン	探す, 求める
<i>rake</i>	Rechen, m. レッヒン	熊手	<i>sick</i>	siech ジーヒ	病氣の
<i>wreak</i>	rächen レッヒェン	復仇する	<i>week</i>	Woche, f. ヴォーヘ	週
<i>reckoning</i>	Rechnung, f. レヒヌング	計算	<i>weak</i>	weich ヴァイヒ	(弱い) 軟らかな
<i>reek</i>	Rauch, m. ラウホ	烟	<i>bleak</i>	bleich ブライヒ	(荒涼たる) 青ざめた
<i>smoke</i>	Schmauch, m. シュマウホ	烟	<i>awake</i>	wach ヴァハ	(不眠の) 目ざめた

<i>speak</i>	<i>sprechen</i> シュプレッヒェン	話す	<i>check!</i>	<i>Schach!</i> シャハ	王手!
<i>stork</i>	<i>Storch, m.</i> シュトルヒ	こうのとり	<i>lake</i>	<i>Lache, f.</i> ラッヘ	(湖) 溜り水
<i>hearken</i>	<i>horchen</i> ホルヒェン	耳を聳立てる	<i>Frederick</i>	<i>Friedrich</i> フリードリヒ	(男名)

非常に一般的で、おもしろいのは、英語の *-ly* にあたる獨の *-lich* という語尾は、英語の *like* (…の如き) であることです。たとえば *freundlich* (*friendly*) ならば、これは元來 *freund-gleich* (*friend-like*) の意なのです。*like* に相當する *gleich* も、„leich” のところが英の *like* で、その前の *g* というのは、*ge-* という前綴がつまつたものです。(英の *luck* が *Glück* となれるがごとし)

7

英語の *t* は、綴頭たると綴尾たるとを問わず、昔からある古い言葉ではすべてドイツ語では *z* (または *tz*) にかかわつています。(以下の例中には形を見ただけではちよつと納得できないものもあるかもしれませんが、歴史的にはみんな變化の筋路がはつきりしているのです)

英	獨		英	獨	
<i>salt</i>	<i>Salz, n.</i> ザルツ	鹽	<i>tide</i>	<i>Zeit, f.</i> ツァイト	(潮) 時
<i>cat</i>	<i>Katze, f.</i> カッツェ	猫	<i>ten</i>	<i>zehn</i> ツェーン	10
<i>net</i>	<i>Netz, n.</i> ネツ	網	<i>tooth</i>	<i>Zahn, m.</i> ツァーン	齒
<i>to</i>	<i>zu</i> ツー	……へ	<i>tongue</i>	<i>Zunge, f.</i> ツング	舌
<i>two</i>	<i>zwei</i> ツヴァイ	2	<i>twig</i>	<i>Zweig, m.</i> ツヴァイク	小枝
<i>heart</i>	<i>Herz, n.</i> ヘルツ	心	<i>wit</i>	<i>Witz, m.</i> ヴィッツ	機智
<i>heat</i>	<i>Hitze, f.</i> ヒッツェ	暑熱	<i>fart</i>	<i>farzen</i> ファルツェン	放屁する
<i>sweat</i>	<i>schwitzen</i> シュヴィッツェン	汗をかく	<i>short</i>	<i>kurz</i> クルツ	(短い)
<i>twitter</i>	<i>zwitschern</i> ツウィチュェルン	囀る	<i>shirt</i>	<i>Schurz</i> シュルツ	(襦衣) 前垂れ
<i>twinkle</i>	<i>zwinkern</i> ツヴィンケルン	またたく	<i>smart</i>	<i>Schmerz, m.</i> シュメルツ	苦痛
<i>toll</i>	<i>Zoll, m.</i> ツォル	料金、税	<i>teach</i>	<i>zeigen</i> ツァイゲン	(教える) 示す
<i>tough</i>	<i>zäh</i> ツェー	ねばり強い	<i>tale</i>	<i>Zahl</i> ツァール	(噺) 數
<i>tongs</i>	<i>Zange</i> ツァング	火箸	<i>tell</i>	<i>erzählen</i> エルツェーレン	話す

<i>top</i>	Zopf <i>m.</i> ツップ	(頂點) 下げ髪	<i>tent</i>	Zelt ツェルト	テント
<i>teat</i>	Zitze, <i>f.</i> ツイツェ	乳首			

最後の *tent*=Zelt のごときは、ラテン語その他の古語を知っていないとその関係は首肯できないかも知れません。teach と zeigen との関係なども、歴史的に詮索してはじめて明らかになったものです。

8

英語で綴尾にある *p* が獨逸語で *f* にかわつている單語がたくさんあります。(綴尾の場合だけです。綴頭の場合はたとえば *plant*, Pflanze [植物] のように、完全には *f* にならず、中途半端に *pf* となります。「パイプ」のことを英語で *pipe*, 獨逸語で Pfeife といいます。これをよく見れば綴頭の *p* と綴尾の *p* との變りかたがハッキリ區別できます。

英	獨	英	獨
<i>ship</i>	Schiff, <i>n.</i> シッフ	<i>ship</i>	Streif, <i>m.</i> シュトライフ
<i>ape</i>	Affe, <i>m.</i> アッフェ	<i>strip</i>	streifen シュトライフエン
<i>harp</i>	Harfe, <i>f.</i> ハルフェ	<i>hope</i>	hoffen ホッフエン
<i>hemp</i>	Hanf, <i>m.</i> ハンプ	<i>leap</i>	laufen ラオフエン
<i>rope</i>	Reif, <i>m.</i> ライフ	<i>heap</i>	Haufen ハオフエン
	Reifen, <i>m.</i> (同上) ライフエン	<i>sleep</i>	schlafen シュラーフエン
<i>sheep</i>	Schaf, <i>n.</i> シャーフ	<i>sweep</i>	schweifen シュヴァイフエン
<i>weapon</i>	Waffe, <i>f.</i> ヴァッフェ	<i>help</i>	helfen ヘルフエン
<i>gape (at)</i>	gaffen ガッフエン	<i>up</i>	auf アオフ
<i>gripe</i>	greifen グライフエン	<i>soap</i>	Seife, <i>f.</i> ザイフェ
<i>drip</i>	triefen トリーフエン	<i>step</i>	Stufe, <i>f.</i> シュトーフ
<i>sharp</i>	scharf シャルフ	<i>stepmother</i>	Stiefmutter, <i>f.</i> シュティーフ・ムッテル
<i>deep</i>	tief ティーフ	<i>landscape</i>	Landchaft, <i>f.</i> ラントシャフト
<i>ripe</i>	reif ライフ	<i>friendship</i>	Freundschaft, <i>f.</i> フロイントシャフト
<i>open</i>	offen オフエン		

ちよつと次の單語を比較して考えてみましょう

英	獨		英	獨	
iron	Eisen, n. アイゼン	鐵	freeze	frieren フラーレン	氷る
hare	Hase, m. ハーゼ	兎	lose	ver-liegen フェル リーレン	失う
was	war ヴァール	あつた	choose	küren キューレン	えらぶ

「氷る」の三要形は英の *freeze, froze, frozen* に對して獨は *frieren, fror, gefroren*; 「失う」は英の *lose, lost, lost* に對して獨は *verlieren, vorlor, verloren* (英語の方でも *for-lorn* [= *verloren*] 見捨てられた, 寄るべなき, という形容詞が残っています); 「えらぶ」は英の *choose, chose, chosen* に對して獨では *kiesen* (あるいは *küren*), *kor, gekoren* です。

すべて英の *s* が獨では *r* になつてゐるという不思議な現象がみうけられます。これはどうしたことでしょうか? *p* が *f* になつたり, *k* が *ch* になつたりするのは發音の自然ですが, *r* と *s* はずいぶんちがつた音ではないでしょうか?

これは, アーリアン系の言語では到る所に見受けられる特殊現象で, 學者はこれを *Rhotacismus* [ロタツィスムス] と呼んでいます。どういふことかといふと, 西洋の昔の言葉では, *s* をなめらかに發音するとき(即ち次に母音か, 或いは *d, g, b* といったような濁音, その他響きの豊富な音が來るとき)には *r* に變えるという特癖です。たとえば, サンスクリット(即ち梵語)では, これが一つの文法上の規則となつてゐます。梵語で「詩人」のことを *kavi* と云い, その一格, 即ち「詩人は」は *kavis* ですが, そのうしろに響きの豊かな *a* とか *o* とか *b* とか *g* とか *v* が來ると *kavis* ではいけなくて *kavir* となります:

kavir vadati 詩人は云う。

しかし, 次に *t* が來ると *s* を用います:

kavis tathā vadati 詩人は斯く云う。

次になにも來ないと *s* は *h* という, ドイツ語の *ch* のような音になります:

tathā vadati kavih 斯く云う, 詩人は

實に厄介だが, これが梵語の音則です。ラテン語でも, 音則というほどではないが, ある種の語, たとえば「口(くち)」という *os* は, 二格になつて「口の」となると, *s* を *r* に變えて, その上に二格語尾 *is* を附して *oris* といいます。澤山ではないがそんな語が若干見うけられるのです。

s と *r* とが, そんなに近い音であつたかどうかは, 昔のことゆゑそうはつきりとはわかりません。しかし, 國語には各々その特癖(いわゆる *Idiosynkrasie*)があつて, 他國人に

は不自然でも、その國の人間には自然に思われるということがあるものです。現に日本語でも、ka が濁つて ga になつたり、sa が濁つて za になつたりするのと同じように、ha が濁つて ba になると大眞面目で信じています。だから青い葉 (ha) のことを aoba というのです。ところが、これは外人にはまつたく不自然に思われる音則で、pa が濁つて ba になるというのは自然の法則ですが、h と b との間には別に何の關係もなく、その間になにか關係があるように思つてゐるのは日本人だけなのです。しかしこれが日本語の音則だからやむを得ません。s と r との間の關係も、つまりはこうしたアーリアン系民族だけの間において自然であつた音則なのでしょう。

10

獨逸語の ei は、大體英語でも i (アイ) です: fein=*fine*; Seite=*side*; Reis=*rice*; Preis=*price*; Schein=*shine*; Zeit=*tide*; reif=*ripe*; Pfeife=*pipe*; Meile=*mile*; treiben=*drive*.

けれども、必ずしもそうは行かない場合が非常にたくさんあります。その中でも、もつとも多くて、しかも最も注意を要するのは、獨の ei が英語で o (發音は必ずしもオウでない場合もありますが) 或いはオウと發音する oa になつてゐる場合です。

けれども、必ずしもそうは行かない場合が非常にたくさんあります。その中でも、もつとも多くて、しかも最も注意を要するのは、獨の ei が英語で o (發音は必ずしもオウでない場合もありますが) 或いはオウと發音する oa になつてゐる場合です。

英	獨		英	獨	
one	ein アイン	1	soap	Seife, f. ザイフェ	石鹼
alone	allein アライン	ひとりで	oak	Eiche, f. アイヒェ	かし(樹)
stone	Stein, m. シュタイン	石	both	beide バイデ	兩方とも
bone	Bein, n. バイン	骨	two	zwei ツヴァイ	2
row	Reihe f. ライエ	列	whole	heil ハイル	全き; 恙なき, 無事な
stroke	Streich, m. シュトライヒ	一打	broad	breit ブrait	幅の廣い
groan	greinen グライネン	うめく, 泣く	rope	Reif, m. ライフ	綱; 輪, タイヤ
clothes	Kleid, n. クライト	着物	oath	Eid, m. アイト	誓い
loan	leihen ライエン	貸附, 貸す	goat	Geiß, f. ガイス	山羊
most	meist マイスト	大抵の	home	Heim, n. ハイム	家, 郷里

<i>ghost</i>	Geist, m. ガイスト	亡霊, 精神	<i>own</i>	eigen アイゲン	自分自身の
<i>snow</i> スノウ	schneien シュナイエン	雪降る	<i>loathe</i>	Leid, n. ライト	(嫌う) 惱み
<i>holy</i>	heilig ハイリヒ	神聖な	<i>token</i>	Zeichen, n. ツァイヒェン	徴, 印

11

英語の *chamber* (室) も獨逸語の *Kammer* (室) も、ともに *camera* というラテンの俗語から派生したのですが (*Kamera* は現に「写真機」の意に用いています。これは「暗室」の意から撮影機そのものの意に變つてきたものです)、英語の方には、一見理由のない *b* が這入りこんでしまつていますが、これはフランス語の *chambre* を通じてこんなことになつてしまつたのです。 *m* を強く發音すると、鼻をひびかせるだけでは物足りなくて、ついでに唇をも景氣よくふるわせて *b* または *p* を發音したくなるのは自然の勢で、多くの語に此の現象が見受けられます。

<i>chamber</i>	Kammer f. カンメル	室	<i>number</i>	Nummer, f. ヌンメル	番號
<i>timber</i>	Zimmer, n. ツィンメル	(材木), 室	<i>whimper</i>	wimmern ヴィンメルン	鼻をならす, 泣く
<i>slumber</i>	schlummern シュルンメルン	まどろむ			

うしろに *-er* という語尾がつかない場合には、英語では *m* の次の *b* は發音しません (*climb*, クライム, *climbing*, クライミング, 攀登, など) が、むかしはおそらく發音したものだろうと推定されます。しかし現在ではサイレントになつてしまつていたので、結局 *b* を書かないドイツ語と、發音の上では大した違いはなくなつたわけです。

<i>climb</i>	klimmen クリンメン	攀る	<i>lamb</i>	Lamm, n. ラム	仔羊
<i>comb</i>	Kamm, m. カム	櫛	<i>crumb</i>	Krume, f. クルーメ	パン屑
<i>thumb</i>	Daumen, m. ダウメン	拇指	<i>clasp</i> クランプ	Klammer, f. クランメル	(締め金) 括弧
<i>dumb</i>	dumm ドムム	啞の, 馬鹿な			

clasp の如く、*p* は發音します。

dumm のほかに *dumpf* (陰氣な) という形容詞もありますが、この方は *pf* がついています。

英語にはまだ此の外 *womb* [ウーム] (母胎, 子宮) とか *limb* [リム] (四肢, 手足) とか *tomb* [トゥーム] (墓所) とかいう似たのがありますが、これらには敵當するドイツ語がありません。

ただ一つの例外は、*atom bomb* (原子爆彈) などという *bomb* [ボム] (爆彈) で、これ

は最近用いた語ですから、ドイツ語でも Bombe [ボンベ] です。

12

英語の *day, way*, が獨逸語の *Tag, Weg* にあたるのでもわかる通り、或種の場合に於て英語の *y* が獨逸語の *g* に相當することは、初學者のすぐ氣付く現象です。これは、獨逸系諸民族のうち、北海岸に近いところにいた各族（即ち英人、オランダ人その他）が、*g* をごくやわらかに發音したために、*g* がすべて母音のようになってしまったのです。（今でもオランダ人の *g* の發音は *k* のようではなく、非常にやわらかです。ドイツ人の中でも、伯林より北の方では、*g* を *j* と同じに發音します。Ganz gut! を「ヤンツ・ユート!」と云うのです）。

綴頭の *g* には、力がはいりますから、此の軟弱化現象はごくわずかしは見受けられません：

英	獨		英	獨
yesterday	Gestern ゲスナルン	昨日	yard	Garten, m. 庭. 庭園 ガルテン
yellow	gelb ゲルプ	黄色の	yawn	gähnen 欠伸する ゲーネン
yarn	Garn ガルン	糸		

綴尾においては、古いことばは殆んど例外なく *g* が *y* になつてゐるか、あるいは完全に母音化して *i* となつてゐます：

<i>day</i>	Tag, m. ターク	日	<i>may</i>	mögen (助動詞) メーゲン
<i>way</i>	Weg, m. ヴェーク	道	<i>lay</i>	legen 横たえる レーゲン
<i>say</i>	sagen ザーゲン	云う	<i>slay</i>	schlagen (屠殺する) 打つ シュラーゲン
<i>honey</i>	Honig, m. ホーニヒ	蜜	<i>fifty</i>	fünfzig 50 フンフツィヒ
<i>penny</i>	Pfennig, m. (貨幣) フエンニヒ		<i>sleepy</i>	schläfrig 眠たい シュレーフリヒ
<i>fly</i>	Fliege, f. フリージェ	蠅	<i>rosy</i>	rosig 薔薇色の ロージヒ
<i>eye</i>	Auge, n. アウゲ	眼	<i>sunny</i>	sonnig 日ざしの温かな ゾンニヒ

綴の中部では、*y* は（單に書方の問題ですが）大抵 *i* となつてゐます。その場合大抵ドイツ語の二綴が英語では單綴になつてしまひます：

<i>rain</i>	Regen, m. レーゲン	雨	<i>tile</i>	Ziegel, m. タイル, 瓦 ツィーゲル
<i>sail</i>	Segel, n. ゼーゲル	帆	<i>rail</i>	Riegel, m. (レール) かんぬき リーゲル

<i>nail</i>	Nagel, m.	釘	<i>flail</i>	Flegel, m.	からざお
	ナーゲル			フレーゲル	
<i>hail</i>	Hagel, m.	雹	<i>roe</i>	Rogen, m.	魚卵, はらご
	ハーゲル			ローゲン	
<i>hill</i>	Hügel, m.	丘	<i>seal</i>	Siegel, n.	印璽
	ヒューゲル			ジューゲル	
<i>rule</i>	Regel, f.	規則			
	レーゲル				

上例中, g が必ずしも i となっていないもの (*seal, roe, rule*) もありますが, それは前に来る母音の関係です。前に *s* または *o* と發音する *a* が来ると, 英語の癖として *w* となります:

<i>own</i>	eigen	自分自身の	<i>bow</i>	beugen	曲げる
	アイゲン			ボイゲン	
<i>fowl</i>	Vogel, m.	鶏, 鳥		Bug, m.	船首
	ファーゲル			ブーク	
<i>bow</i>	Bogen	弓	<i>saw</i>	Säge, f.	鋸
	ボーゲン			ゼーゲ	
<i>bow</i>	biegen	曲げる			
	ビーゲン				

綴尾の *-lg, -rg* は, その次にどんな綴母音が来ようと, 英語ではすべて *-llow, -rrow* となつてしまいます。アクセントのないお尻尾の方はすべて好い加減に發音してしまうという英人の癖があらわれているわけです。

<i>morrow</i>	Morgen, m.	(古)朝, 朝	<i>gallows</i>	Galgen, m.	絞首臺
	モルゲン			ガルゲン	
<i>sorrow</i>	Sorge, f.	悲痛, 心配	<i>bellows</i>	Blase-balg, m.	ふいご
	ゾルゲ			ブラーゼ バルク	
<i>follow</i>	folgen	従う	<i>billow</i>	Bulge, f.	(大浪)[方言] 大浪
	フオルゲン			ブルゲ	
<i>borrow</i>	borgen	借りる	<i>swallow</i>	schwelgen	(嘔み下す) 耽る
	ボルゲン			シュヴァルゲン	

r, l の次に (g のみならず) *ch* や *k* や *b* が来る場合にも, 英語ではすべて無差別に *rrow, llow* となります:

<i>furrow</i>	Furche, f.	畝間の條溝	<i>yellow</i>	gelb	黄色の
	フルヒュ			ゲルブ	
<i>marrow</i>	Mark, n.	髓	<i>swallow</i>	Schwalbe	燕
	マルク			シュヴァルベ	

こうした英語の癖のために, [燕] (Schwalbe) も「のみ下す」「耽る」(schwelgen) も, 兩方とも英語では *swallow* となつて, 全然一語となつて見えるわけです。漢字でも「燕」と「嘔下する」との相似がありますが, これでおぼえておけば忘れません。

13

英語の *ch* がドイツ語で *k* になつている單語が相當多く見かけられます。(ch と同音の

itch も同様) これは主として綴頭に関する法則です。

英	獨		英	獨	
<i>chin</i>	Kinn, <i>n.</i> キン	あご	<i>chalk</i>	Kalk, <i>m.</i> カルク	(白堊) 石灰
<i>chest</i>	Kiste, <i>f.</i> キステ	箱	<i>channel</i>	Kanal, <i>m.</i> カナール	水路
<i>cheese</i>	Käse, <i>m.</i> ケーゼ	チーズ	<i>chapter</i>	Kapitel, <i>n.</i> カピッテル	章
<i>chicken</i>	Küchen, <i>n.</i> キュッケン	鶏肉, ひよつこ	<i>chew</i>	kauen カオエン	噛む
<i>cherry</i>	Kirsche, <i>f.</i> キルシェ	櫻ん坊	<i>choose</i>	kiesen キーゼン	選擇する
<i>chimney</i>	Kamin, <i>m.</i> カミン	煙突, 壁爐	<i>Charles</i>	Karl カルル	(男名)
<i>chain</i>	Kette, <i>f.</i> ケッテ	鏈(くさり)	<i>churl</i>	Kerl, <i>m.</i> ケルル	野郎, 男, 漢
<i>chamber</i>	Kammer, <i>f.</i> カメル	室			

上例中には、あまり形がちがつているために、同語としてならんでいるのを見ると、ちよつと牽強附會のように思われるものもありましょう。たとえば chain=Kette のどきがそれです。けれども歴史的にはそれぞれ譯があるので、chain も Kette も後期ラテンの *cadena* から來たもので、*cadena* がフランス語で *chaîne* となり (*regina*, 女王, が *reine* になるように), それが chain となつたのです。ドイツ語の Kette は *cadena* のうしろがなくなつたわけです。

以上は、綴頭の場合ですが、綴尾にも此の關係が多少は現れています：

itch	jucken ユッケン	痒い	bench	Bank バンク	ベンチ
starch	Stärke シュテルケ	糊	drench	tränken トレッケン	飲ます
stretch	strecken シュトレッケン	張り伸ばす			

英語では bench (ベンチ) と bank (銀行) とを區別していますが、ドイツ語では兩方とも die Bank で、形の上では區別がありません。ただベンチの意の Bank は、複数が Bänke となり、銀行の意の Bank は Banken となります。

集句常用別項事

(1) 生計に関するもの

1. Ich bin auf die Einkünfte meiner Frau angewiesen.
(私は妻の収入が頼りなんです)

Einkünfte (収入) は必ず複数形のままを用います。Unkosten (雑費) や Kosten (費用) もやはりそうです。auf……angewiesen (云々が頼りである。云々に依存している) という形式を嚙呑みに覚えること!

2. Wir liegen noch immer dem Vater auf der Tasche.
(僕達はまだ親父の脛を噛つています)

「脛を噛る」ということをドイツ語では「ポケットの上に乗つかつている」と云います。乗つかられたポケットこそ好い迷惑で、さぞ貴君のお尻の重壓の下に呻吟していることでしょう。

前項の auf……angewiesen でも云えます: Wir sind noch immer auf den Vater angewiesen.

3. Man findet so oder so sein Fortkommen. (なんとかしてでもやつて行けるものですな)

これはよく用いる句ですから、特によく覚えておくと爲めになります。so oder so (どうかして、なんとかしてでも) というのは、換言するならば bald so bald anders (ある時はコウして、またある時は別な風に) で、此の手あの手と、いろんな風に、ということです。それから、此處で重要なのは das Fortkommen (生計、「やつて行く」こと) という言葉です。日本語では「やつて行く」と言うが、ドイツ語では「はかどつて行く」、「進行」という Fortkommen, または Weiterkommen を用いるのです (英語も *getting along* で、意味はやはり「進歩」から来ています)。また、近頃はよく Vorwärtskommen (前進) ということも云います。いずれにせよ、個人の生計にしろ、事業の経営にしろ、すつかり行き詰まつて二進も三進もなくなつては大變ですから、とにかく「何とかやつて行ける」という事が一番ありがたいことで、これがマタ言葉としても一番頻繁に用いられるという事実によつて、人生という所が如何に世智がらみ所であるかということが切實にわかります。

次の例によつて「やつて行く」の表現に慣れること!

[A] Wie kommt man im harten Leben fort? (このセチがらい人生をどうしてやつて行くかだ。)

[B] Man muß doch für sein Fortkommen sorgen, nicht wahr? (だつて何とかしてやつて行けるようにしなくちや仕様がないでしょう?)

[C] So kommen wir nicht weiter! (これじやアわれわれ共としてはやつて行けませんです)

[D] Es ist kein Vorwärtsskommen mehr. (もう何としてもやつて行けなくなつた)

[E] Er hat sein gutes Fortkommen. (あいつは景氣が好いんだ)

同意の語に Auskommen というのもあります (次項参照)。

4. ein standesgemäßes Auskommen. (身分相應の暮し)

Auskommen (暮し向き) も前述の Fortkommen と大體同意の語です。餘裕のない暮し向きなら Wir haben ein knappes Auskommen (我々は、カツカツの脱出を持つ) と云い、相當の暮しをしているなら Wir haben ein anständiges Auskommen と云います。

身分相應 (standesgemäß) というのをよく覚えること! 分解して云うときには seinem Stande gemäß (おのが身分にふさわしく) と云います。「身分不相應」の方は standesungemäß と云えないことはないが、これはまあ大抵身分以上という意で、以下のことはあまり云いませんから、そのためには über seine Verhältnisse (beyond one's condition) 「己が懷具合を超えて」という言葉があります。

[A] Man muß sich doch standesgemäß kleiden. (身分相應のものを着なくちやなりませんからね)

[B] Das halte ich für durchaus standesgemäß. (まあそれ位のところがちやうど身分相應だろうと思いますね)

durchaus という副詞はドイツ人のよく使う語で、まあ大體「斷然」とか「全く」とか「正に」とかにあたります。

5. Es gibt viele Kriegswitwen, die durch Näharbeit und so sich mühsam fortbringen. (縫仕事などしながらやつとの事で食つてゆく戦争のための未亡人がたくさんいます)

und so は, und dergleichen, und so weiter などと同意, つまり「など」という通俗語です。sich fortbringen (食つて行く) は, 大體 fortkommen と同意ですが, 「やつと」(mühsam; mit Müh und Not) という時に主として用います。sich fortschleppen あるいは sich durchs Leben schleppen と同じで, 重い足を引き摺り引き摺り, やつとのことで歩いて行くことを

考えるわけです。

sich über Wasser halten (自己を水面上に保つ)とも云います。これは泳いでいる人間がアップアップしている所を考えたもので、たとえば Ich halte mich durch Privatunterricht und ähnliches über Wasser (僕は個人教授なんてことをしてやつと食っています)

6. Meine Finanzlage hat sich wesentlich gebessert. (僕の財政状態は非常によくなりました)

懐具合の事を人に話すのは難だつて多少恥かしいとしたもので、日本人もドイツ人も、意識的に「かたいことば」を使つて體裁よく表現しようとしします。「財政状態」(Finanzlage, f.)だなんて、まるで大會社か何そのように! wesentlich (本質的に)というやつは、これは日本にはないようです。「根本的に」(gründlich)とでも云えばいいところを、「本質的に」だなんて、近頃の西洋語もずいぶんキザなことを云い出したものです(英語も全然同じで「根本的に」を essentially「本質的に」といいます)。

「財政状態」のことを「經濟状態」(wirtschaftliche Lage)ということもあります。けれども、前者の方が「懐具合」としては本當の用語でしょうね。materiell については次項。

こういう場合、gebessert を verbessert と云つてはいけません。bessern (または aufbessern と云いますが)は「改善する、向上せしめる」ことで、verbessern というのは、誤などを訂正することです。

7. Sie kennen ja keine materiellen Sorgen. (あなたは金の苦勞というものを御存じないから)

materiell (物質的)と云つたところで、べつに「物」の苦勞ということではなく、これも finanziell (財政的), wirtschaftlich (經濟的)と同じことです。日本語でも、すぐ報酬のことなどを先に云い出す人間が居ると、物質的な考え方だとか云つて批評しますが、その「物質的」が此の materiell の譯語なんです。「物質的には何等むくられる所がなかつた」はドイツ語でもやはり Materiell hat es sich der Mühe nicht verlohnt です。Materiell hat es mir zwar nichts eingebracht と云えるでしょう。いわゆる「汚ない考え方」は materielle Gesinnung, あるいは面白い通り言葉としては Gesinnungsmaterialismus とか Materialismus der Gesinnung とかいうのまであります。

8. Ich bin anspruchslos; das wenige, was ich zum Leben brauche, ist immer noch aufzubringen. (僕は贅澤は云わない方です。生活のために必要な少々の金は今だつて何とかなつて行きます)

あれも買いたい、これも欲しい、煙草もなくてはすまされぬ、という氣持のことを An-

ansprüche, pl. (「慾」,「贅澤」)といます。(Ansprüche は積極的であり Bedürfnisse(必要, 必需)は消極的です。両方とも「要求」という点では同じですが)したがって「贅素」,「無慾」は anspruchlos で,「ぜいたく」は anspruchsvoll,あるいは verwöhnt です。Ich habe kulturelle Ansprüche (僕は文化的要求を持っています)といえは,たまには書物の一冊も買いたい,といったような人間だということです。

aufbringen に注意!こいつは,サア何と译しますか,ちよつと日本語にはピッタリした譯語の無い面白いことばで,つまり,いわゆる「才覚する」,「都合する」に一寸似ています。「上に・もたらす」(auf-bringen)という構造から考えてもわかるごとく,とにかく何處か深いところに隠れていた物を,やつとのことで上まで持ち上げて來ること,或いは auffinden, (見つけ出す)と同じで, auf- は「開發」の意 (aufschließen) と思えばよいでしょう。次項の aufkommen を参照。

9. Dabei muß man auch noch für die Schulgelder der Kinder aufkommen! (そうしていて,おまけに子供たちの學費まで拂わなければならないんですからねえ!)

Dabei (その傍ら)と auch noch (あまつさえ,おまけに,その上まだ)とは,この様に,よく結合して用いられます。Und dabei verlangst du auch noch Geld! (その上おまけに金まで寄越せというのか!) Und dabei lügt er auch noch! (おまけに云う事がすつかり嘘と來てやがる)

für etwas aufkommen は,前項の etwas aufbringen と同じで,要するに「出す」(耳をそろえて出す)ことです。主として世間體を考えるとときに用いる語で,出さなければ飛んだ恥をかく,といったような金を,一人前に出して面目を全うすることを für etwas aufkommen ということです。「拂えない」のなら für etwas nicht aufkommen können です。

10. Ich hoffe zwar, ich reiche mit dem Monatsgehalt aus.
(まあ多分月給だけで間に合うだろうとは思いますがね)

zwar というのは「まあ……ではあるけれども」という,少し煮え切らない調子を出すための助詞です。(即ち,如何にも其の次には aber…… と來そうな口吻になるわけ)

mit……ausreichen (……で間に合う,……で足りる)をよく覚えること。ausreichen は hinreichen, zureichen と同じで「足りる,充分である」の意ですが,物を主語にして Das Monatsgehalt reicht bis zur Mitte des Monats aus (月給は月の半ばまでは持つ)などと云う以外に,上掲の如く,人間を主語にしていることもできるのです。

11. Man soll keinen Groschen unnütz ausgeben, denn es kann auch einmal wieder anders kommen. (一文でも無駄金

を出すことは嚴禁だ、景氣という奴はどう變つて來るかわかつたものじゃない)

es kann auch 云々は、直譯すると「それはまた或る時になるとマタ様子が變るということもあり得る」です。Es kommt anders は「形勢一變」或いは「期待はずれ」という非人稱熟語。

(2) 力量と才能

1. Dazu habe ich eben keine Veranlagung. (そういう事は
どうもチョット苦手です)

能力 (Fähigkeit), 才能 (Talent, 才), 得手 (Stärke) などと共に、此の Veranlagung (素質) という語をよくおぼえること。素質、生地、性 (たち, しょう), 個性, というやつです。「そういう方面に對しては私はツマリ (eben) 素質を持たない」というわけです。

2. Meine Stärke liegt nur im Büffeln. (僕の得手は糞勉強
だけです)

得手, 強み, お得意, は Stärke で, 愈所, 獨め手, 苦手, 鬼門, 弱點は Schwäche です。ただし Schwäche は Vorliebe (愛好心) の意に用いることもありますから、これとは區別しておぼえて下さい。たとえば Ich habe eine Schwäche für den Schach (僕は將棋が大好きなんです) など。

3. Geldverdienen war nie meine starke Seite. (金儲けと
いう奴だけは元つから苦手です)

Stärke という代りに starke Seite と云うことがわかります。同様に Schwäche (不得意) という代りに schwache Seite と云えます。

4. Das geht über meine Kräfte. (これは私の力には及びま
せん)

「力量」という意味の「力」は、Kraft と云いますが、複數形の Kräfte を用いる事が多いのです。

5. Hier ist mein Latein zu Ende. (こうなるとモウ俺は匙を
投げる)

「此處で我輩のラテン語はモウ終である」というのが面白いではありませんか。ラテン語という奴は、普通の人間は、三つ四つ格言を知っている位のもので、もつと云つて見ろと云われたつて、三つ四つ言つてしまえばそれでモウおしまいの事が多いからです。

6. Auf der Rednerbühne ist er in seinem Element. (演壇はかれの得意の世界だ)

Element というのは四大、即ち地水火風のことで、たとえば魚は水を以て己が Element, 即ち「お得意の世界」としますから、空中では元氣がないが、水の中では威張っている、即ち Im Wasser ist der Fisch in seinem Element です。従つて、辯舌の得意な人間は、演壇に立つという、まるで自己本來の世界に歸つたように、急に元氣が出て自己本來の眞價を發揮するから斯く云うのです。Auf der Rednerbühne fühlt er sich zu Hause とも云います。つまり、なれつこだ、お得意の世界だ、ということです。

7. Im Aufsatz kann ich schon meinen Mann stehen. (作文なら敢て人後に落つる者ではありません)

seinen Mann stehen können は、いわゆる「男一匹」の力量をお目にかけることができるといふ熟語で、ドイツ語では Mann という語を日本語の「男一匹」と同じように用いることが度々あります。

8. In mancher Beziehung steht er über dem Durchschnitt. (諸種の點で彼は非凡の才能を持つている)

Durchschnitt, *m.* は「平均」すなわち標準的な水準のこと (21 参照)。従つて durchschnittlich という、「平均の」、「標準的な」、「普通の」という意味になると同時に、少し品が下落して「凡庸な」(mittelmaßig), 「大したものではない」という意味にもなります。

9. Er ist ein Universalgenie. (あいつは何でも屋だ)

何でも屋は好いが、藝が身を助けすぎると、遂にはいわゆる Mädchen für alles (英語でも maid-of-all-work) 「雑務働きの女中」という奴にされてしまつて、イヤ原稿も書け、イヤ挿畫も描け、イヤ校正も自分でしろということになるから考へ物ですぞ。僕もモット無能だつたら今頃は文部大臣ぐらいになつてゐる筈なんだがなあ。

10. Aus ihm wird nichts. (あいつは碌な者にはなるまい)

反對に Aus ihm wird etwas と云えば、あいつは今に相當なものになる、の意。

11. Ich weiß, was in ihm steckt. (僕はかれの實力を知つて
いる)

詳しく言うと、「實力」というのはちよつと妥當ではなく、was in ihm steckt (かれの中に潜むところのもの) といふのですから、むしろ素質 (前述の Veranlagung) として潜在的に、未發の狀態に (virtuell) あるものをいうわけです。「實力」と云いたければ Ich weiß, was er kann と云えばよろしい。Zeig, was du kannst! (お手並拜見) などといふことを云います。

12. Damit werden Sie nie fertig, selbst wenn Sie sich auf den Kopf stellen. (それは、たとえ鯢鉾立ちをしたつて、あなたには出来ない仕事ですよ)

「出来る」、「やつつける」、「やり畢せる」といふ語はいろいろありますが、平易なものとしては次の二三を知つておく必要があります：

[A] mit etwas fertig werden (können).

[B] etwas zustande bringen,

[C] etwas schaffen,

殊に mit……fertig werden がもつとも平易で、しかも決して俗語ではなく、現在のいちばん通りの好いドイツ語ですから、こんなのを本當に自分のものにすることが必要です。これなら、いくら濫用してもおかしくはありません。Bist du mit deinem Aufsatz fertig geworden? (君、作文はもう書けたかい?) Ich muß zusehen, wie ich damit fertig werde (といつを何とかしてやつつけてしまわなくちや)

13. Seine diesbezüglichen Fähigkeiten sind ganz beachtenswert. (そうした方面での彼の技倆は相當なものだ)

diesbezüglich は「その件に關する」、「その問題に關係する」。

14. Was mir an Geschicklichkeit fehlt, ersetze ich durch Fleiß. (技倆でおつつかない所は勤勉で補います)

直譯：「手際に於て缺くる所のものを、私は勤勉によつて補充する」。……「手際」、「腕前」は Geschick, n. と云います。(次項)

15. Das Geschick ist ihm sozusagen in Fleisch und Blut übergegangen. (あの人は、技倆がもうすつかり身についてしまつ

ているからね)

「身につく」ということを「肉と血の中へ移つてしまつている」というわけです。sozusagen (翻わば) は gleichsam と云います。

16. Wir haben technisch geschulte, zuverlässige Kräfte.
(こちらでは、技術的に熟練した、安心して任せられる連中が揃つて
おります)

「弊社は」とか「當方では」という場合には wir (英語でも we) を使います。Kräfte, pl. は, Personal, n. と同じで、「人員」、「要員」、「顔觸れ」、すなわち、或る会社とか工場とか官衙とかに勤めている人間の總體を指している語。

17. Das geht jedem Anfänger so. (初めてやる人というものは、みんなそんなものですよ)

Es geht 云々、という、あんまり體裁の好い文になりすぎて迫力がない。Das と云つてはじめて通俗語らしい迫力が生ずる。ヘンなものです。

18. Das Problem spottet meiner geringen Kenntnisse. (此の問題は私の少々の知識では全然齒が立ちません)

「此の問題は私の微弱なる知識を嘲笑う」というわけです。spotten は二格支配。

19. Da heißt es: das Letzte aus sich herausholen. (こうなると愈々總身の力を振り起さなければ駄目だ)

Da heißt es は「こうなると愈々……ということになる」、「さあ……しなければならぬ」です。「最高の努力をする」(das Beste tun) よりも更に一層力強い表現が此の「己れの自身の中から最後のものをしぼり出す」という句です。das Beste hergeben と云います。

20. Es fragt sich nur, ob ich meiner Aufgabe gewachsen bin. (ただ私が此の任に堪えるかどうかです)

Es fragt sich は Die Frage ist または Est ist die Frage と同じで、「……かどうか問題だ」という熟語。その次には大抵 ob あるいはその他の疑問詞が來ます。

gewachsen は「……に堪える」という三格支配の形容詞。

21. Überdurchschnittlich Begabte werden entsprechend

befördert. (普通以上の才能を有する者はそれに應じて進級する)

der Durchschnitt が「標準程度」, 「平均」, 「並み」, 「普通」で、從つて über Durchschnitt (並以上), unter Durchschnitt (並以下) ということを云うわけです。begabt は talentiert (才能ある, 力量ある) と同じ。entsprechend (それに應じて, それはまたその様に) は demgemäß (それに從つて) と云えましょう。(英語でもこういう時に *accordingly* と云います) befördern (促進する) は、此處では昇進させる意。

22. Aus "Wunderkindern" werden gewöhnlich nur sehr ordinäre Menschen. (いわゆる神童という奴は大抵凡庸な人間になつてしまう)

「神童」は Wunderkind (奇蹟兒), ordinär は、けつきよく gewöhnlich と同じですが、「平凡」, 「凡庸」という時には此の ordinär という外來語がいちばん適切です。durchschnittlich と云います。

妙なもので、「標準的」というと、好い意味では「人並み」即ち「立派に一人前」ということになり、悪くなると「凡庸な」, 「大したものじゃない」(mittelmäßig, ordinär) ということになる……どつちかにかところがあるあぶない言葉です。

23. Der Laie wird dringend davon abgeraten, selbst Eingriffe vorzunehmen. (素人の方は絶対に自分で手をお下しにならぬよう、特に御注意申しあげておきます)

素人は der Laie, der Außenseiter (部外者), 専門家は der Sachverständige, der Sachkundige, der Mann vom Fach, der Fachmann 等。dringend abraten は「切にとめる」。Eingriffe vornehmen は單に eingreifen と同じで、「手出しをする」, 「手を下す」, 「いじくる」など。

24. Das ist eben eine Gabe, die dem Menschen in die Wiege gelegt wird. (こういう才能は、けつきよく持つて生れるものなんですね)

つまり「生れつきの才能」(angeborene Gabe) だというのは、生れつくということをも「搖籃の中へ入れてもらう」というのが凡ゆる西洋語に共通な表現です。だからたとへば「私は數學という奴は生來あまり得意じゃない」を Die Mathematik ist mir auch nicht an der Wiege gesungen worden (數學は私の搖籃のそばでは歌われなかつた) と云います。

25. Es ist kein Meister vom Himmel gefallen. (天から降

つた巨匠はない)

巨匠は一朝にして成らずということで、これは有名な諺です。天から降るといふのは、地から湧くと云つても同じで、忽焉として地上に現れることです。

(3) 機會, 運, 偶然, 等

1. So eine Gelegenheit bietet sich nicht alle Tage. (こんな機會はそうざらにあるものじゃない)

Solch eine schöne Gelegenheit bietet sich nur einmal und nie wieder (こんな絶好のチャンスは一度提供されるきりで、二度とは来ない) などとも云います。いずれにしろ、Gelegenheit と云えば必ず sich bieten という再歸動詞を連想するようにおぼえること。

2. Warum sollte man sich die schöne Gelegenheit nicht zunutze machen? (此の絶好の機會を利用しないという手はない)

Warum sollte……nicht……? は、「どうして云々せずにいられようか?」「どうして云々して悪かろう」という形式。

「機會を利用する」は die Gelegenheit benutzen, sich die Gelegenheit zunutze machen, または die Gelegenheit wahrnehmen と云います。「機會を見て取る」は sich die Gelegenheit ersehen, 「チャンスをつかむ」は die Gelegenheit ergreifen, あるいは die Gelegenheit beim Schopfe fassen (機會の前髪をつかむ) と云いますが、これは、ギリシャ神話に「機會の神」(Kairos, カイロス) というのがあつて、この神さまは、前頭部にだけ髪の毛があつて、後頭部はツルツルに禿げているということになつていたからです。これはなかなか意味深長で、機會という奴が向うからやつて来たら、傍を通りすぎないうちに、少し早目に手を出してつかまえないと、少しでも行きすぎてしまつてから、うしろから頭の髪の毛を引つぼうとしても、うしろはツルツルに禿げているから駄目だ、ということなのです。因みに小生は Kairos の反對で、前の方がツルツルですが、後頭部にはまだいくらか毛があります。

3. Jetzt oder nie! (好機逸すべからず)

「今か、然らずんば、決して」すなわちこれを外したら百年目ということ。

4. Lassen wir uns die schöne Gelegenheit nicht untätig entgehen! (此の絶好の機會をみすみすのがしてなるものか!)

「機会を逸する」は sich die G. entgehen lassen または die G. versäumen, verpassen, vorbeigehen lassen など。

5. Der Schleichdieb erhascht sich den günstigsten Augenblick. (「かつばらい」は最も好条件な瞬間をキャッチする)

erhaschen というのは、たとえば鳶が油揚げをさらうように、隙を見てサッと渡うことを云います。

6. Da komme ich ja gerade richtig! (ちょうど好い時に来たもんですな)

なんてって一緒に食卓に就いてしまうという手もあるわけです。gerade が「ちょうど」。こんな人が来ると、Sie kommen ja wie gerufen (まるで呼んだようにやつて来ましたね) と云つて盃を出します。だつて膳を片づけるのもおかしいから。

7. Das hat sich gut getroffen! (これはまた巧くぶつかったものだ)

金を借りに出掛けようとするとうから金を貸しにやつて来た……そんな事も無いでしょうが、着しあつたらそんな時に斯う云うわけです。

現在形で Das trifft sich ja gut! と云います。

8. Er meldet sich heute zum Besuch an, ausgerechnet heute, wo ich doch so viel zu tun habe! (あの野郎、今日来ると云つて通知して来たんだがね、今日はまた折り悪く俺はとても忙がしい日なんだよ)

sich zum Besuch anmelden は「自分を、訪問のために、申し込む」、即ち訪問の豫告をすることです。ausgerechnet (わざわざ、時もあるうちに、選りによつて) は、ausrechnen (計出する) から作つた副詞で、つまり「まるで最悪の場合を算盤で弾き出したように」、「これではなくちや不可んと特に目星をつけたように」という意から来ています。ここでは「折りあしく」ですが、時間ばかりとは限らず、「人もあるうちに」、「物もあるうちに」、「場所もあるうちに」その他何にでも用います。

9. Aller schlechten Dinge sind drei. (悪い事は三度ある)

西洋人もこんな事を云うから呆れたものですね。これは Aller guten Dinge sind drei (好

い事はすべて三つ揃う必要がある)などと云つて、三人目が生れた時などに苦笑いで人前をつくろう時に云う言ひ草を一寸變えたものです。

sind drei とか sind vier とか sind viel とかいう場合にはすべて二格を用いるのに注意。「お客は三人だ」は Der Gäste sind drei です。

同じことを Unglück kommt nicht allein (不幸は單獨ではやつて來ない)とも云います。

10. Das nenn' ich aber einen glücklichen Zufall! (偶然とは云え實に巧く行つたものだねえ!)

Das nenn' ich aber……! という形式になれること。Das nenn' ich aber ein Schwein! (運がよかつたね!) Das nenn' ich aber ein Glück im Unglück! (不幸中の幸というのが此のことだ!) Das nenn' ich aber fressen! (よく喰うなあ君は!)

11. Das Leben geht seltsame Wege. (人の運というものはわからんものでね)

此の屢々用いられる通り言葉は、妥當に譯するとすればやはり文字通りに「人生というものは不思議な道を歩むものだ」というのが好いでしょう。身の上、お互の關係等の不思議なめぐりあわせに驚く時に用いる句です。Die wunderbaren Wege der Vorsehung (神の攝理の奇しき路)などというのも同種類の云い廻しで、まるで芝居のような筋書になつた時に此の文句を使います。

12. Der Zufall hat mir das fragliche Dokument in die Hände gespielt. (私は偶然その問題の書類を手に入れた)

奇縁。すなわち Die Laune des Schicksals (運命の氣まぐれ), das Spiel des Zufalls (偶然の戯れ), その他一般に Schicksal や Zufall を主眼にすると、好んで spielen (カルタのやり取りをすること)という動詞を用います。in die Hände gespielt の代りに in den Schoß geworfen (膝の上へ投げてよこした)とも云います。

13. Mal trifft man es gut, mal trifft man es schlecht. Na, das kann man doch nicht voraussehen. (好いのにあたることもある、悪いのにあたることもある。いやどうも、其の時になつて見なければわかりませんよ)

Mal……mal…… は bald……bald…… と同じで、「……の事もあれば……の事もある」という形式です。es gut (schlecht) treffen は「まんが好(悪)い」という熟語動詞。Na は Nun と同じで、「いやどうも」に相當する間投詞。

14. Unverhofft kommt oft. (まさかと思つたことが本當にそうなる)

まさかと思わなければなおさらそうなる (und Verhofft kommt desto öfter) とでも附け足したいところです。

これは hofft と oft とが韻が合っているのでもわかる通り、諺です。

15. Wettersvoraussage gleicht ganz einem Lottospiel, in welchem sich neben vielen Nieten auch einige Treffer finden. (天気豫報という奴はまったく富籤みたいなもので、たくさんの空籤にまじつて多少の當籤もあるというわけだ)

「富籤」は das Glücksspiel の一種で、die Lotterie, das Lotteriespiel, das Lotto などとも云います。die Nieten が空籤, der Treffer が當り籤。

16. Oft bleibt gerade das Wichtigste dem Zufall überlassen. (往々にして最も肝腎な點が偶然に左右される)

「偶然にさらされている」(dem Zufall ausgesetzt), 「偶然に打ち任されている」(dem Zufall überlassen または überantwortet または anheimgestellt), 「偶然に左右される」(hängt von Zufällen ab; unterliegt dem Zufall; ist dem Zufall unterworfen)

17. Das war also ein reiner Zufallstreffer. (これは本當のまぐれ中りだつたのです)

日本語では犬も歩けば棒にあたると云いますが、ドイツ語では「盲の鶏だつて穀粒をみつめることもある」(Ein blindes Huhn findet auch ein Korn) と云います。

18. Das ist zum Teil eine Glückssache. (これも一つは運の問題でしてね)

運の問題 (Glückssache) にせよ、趣味の問題 (Geschmackssache) にせよ、意見の問題 (Meinungssache) にせよ、すべて -sache という語を用いる點に注目! ただし「それはもはや時間の問題だ」は Das ist nur noch eine Frage der Zeit という。

19. In diesem Zusammentreffen erblicke ich eine gute Vorbedeutung. (此の偶然の一致は幸先が好い)

偶然の一致、暗合、は *Zusammentreffen*, *blindes Zusammentreffen*, *zufällige Übereinstimmung*.——幸先が好い、吉兆、は *gutes Vorzeichen*, *gutes Zeichen* とも云います。

20. Ein scheinbar harmloser Umstand kann uns zum Verhängnis werden. (ちよつと考えると何でもなさそうな事が、後で大變なことになつて來ることがある)

直譯すると、scheinbar 見たところ harmloser 無害な (何でもない) Umstand (事象) が uns 吾人にとって zum Verhängnis 宿命に (悲運に) werden なる kann ことがある。

(4) 注 意 と 用 心

1. Da heißt es: scharf aufpassen! (油斷大敵!)

Es heißt という非人称動詞は、「……する必要がある」、「……しなくては駄目だぞ!」、「……を要す!」という、強い警告の意をもつた形式です。つまり Es gilt と同じです。此の場合も Da gilt es または Hier gilt es と云つてもいいのです。

scharf aufpassen (鋭く注意する) はよく用いられる句、scharf aufmerken とも云います。(形容詞を用いて aufmerksam sein といえ、もつとおだやかな程度の表現になります)

「耳を聳てる」、「聴き耳を立てる」ならば aufhorchen, die Ohren spitzen.

2. Ich bin ganz Ohr. (耳の穴をほむくつて承りましょう)

非常に注意して聴くことを ganz Ohr sein (すつかり耳である) と云います。つまり、人間ではなくて、もはや耳のお化けみたいなものであるということになります。「謹しんで承りましょう」という時には Ich bin ganz Ohr と云います。自分の頬が喉自慢にでも出たらカーンと一聲鳴るまでは親たちはラジオに嗜りついて ganz Ohr です。カーンと鳴つた後にやつと脳味噌その他の部分が正常の機能を回復します。(いつたい世の中にはカーン一聲で治りそうな病氣が非常に多いようですが)

同じ様に Er war ganz Auge と云うと、「かれは鶴の目鷹の目だつた」、「かれの全身の注意は眼に集まつていた」ということになります。

3. Ich habe nur mit halbem Ohre hingehört. (私は注意もせず好い加減に聞いていました)

nur mit halbem Ohre (ただ半分の耳を以て) は、單に nur halb とも nur obenhin (上の空で、うかうかと) とも、ohne rechte Aufmerksamkeit (本當に注意しないで) とも云います。Ich habe hingehört, ohne viel darauf zu achten とも云います。

4. Ich war nicht recht bei der Sache. (私はその方に氣が向いていなかった)

身を入れて聞かない、ぼんやりと他の事を考えている、氣を留守にする、という事を nicht bei der Sache sein 或いは單に nicht dabei sein と云います。Ich war woanders mit meinen Gedanken (私は私の考えを持つて餘所へ行つて居た), Ich hatte gerade ganz andere Dinge im Kopf などということもあります。「氣が留守」はドイツ語でもやはり geistesabwesend (*absent-minded*), 「氣が散つている」, 「ぼんやりしている」は zerstreut.

5. Man kann doch nicht überall seine Augen haben. (そう何から何まで萬遍なく眼が届くというわけにも参りません)

肝腎な時に晝寝する人の言い草です。

6. Jeder war zu sehr mit sich selbst beschäftigt, um seinem Tun besondere Aufmerksamkeit zu schenken. (みんなそれぞれ自分の事に氣を取られていたので、特にかれの舉動に注意を拂う者も居なかつた)

何か一生懸命に考えているとか、書いているとか、或いはボンヤリしていて、身邊に氣のつかない状態の事を mit sich selbst beschäftigt sein (己れ自身に係り合つている) というのは凡ゆる西洋語に共通の表現です。

「注意を拂う」の「拂う」は英語の *pay attention* の直譯で、ドイツ語では zahlen ではなく Aufmerksamkeit zollen 或いは schenken と云います。

7. Das Nächstliegende entgeht einem am leichtesten. (最も手近かな事に限つて一番見落とし易い)

いわゆる燈臺下暗しです。einem は man の三格。entgehen (脱する、逃れる) は三格支配で、たとえば「かれの眼が光つている」と云つたような時には Nichts entgeht seinem wachsamen Auge (何一つとしてかれの警戒嚴重な眼をのがれ得ない) と云います。

8. Fassen Sie es recht ins Auge! Nun? Merken Sie was? (よく睨んで御覽なさい! どうです? 何か氣が付きませんか?)

云われて睨んで見ると「チョコレートではありません、洗濯石鹼です!」と浮き彫りになつて書いてあつたなんて事があります。

9. Äußerste Vorsicht geboten! (厳に注意を要す!)

警戒の意味の「注意」、「要心」、「戒心」は die Vorsicht, die Achtung, 等で、「要心する」は sich in Acht nehmen, auf seiner Hut sein, Vorsicht walten lassen, 等です。

geboten は「望ましい」という形容詞で、「切におすすめる」という時に用います。

Achtung! という掛け聲は、大勢に向つて注意をうながす時の「注目!」にも用い、また、戒しめる時にも用います。たとえば四つ角に立っている交通巡査が Achtung! Rotes Licht! (もしもし、赤ですよ!) と云つて注意するなど。「御注意!」、「御用心!」は Aufpassen! Aufgepaßt! と云います。Gib acht! Geben Sie acht! も普通です。

10. Es kann nachher zu sehr unangenehmen Folgen führen, wenn man die nötige Vorsicht nicht walten läßt.
(必要な注意を怠ると後で非常に厄介なことになる)

取扱い等に細心の「注意を拂う」、「萬全を期する」ことを die nötige Vorsicht walten lassen と云います。

11. Die Oeffentlichkeit verfolgt das Ereignis mit gespanntem Interesse. (世間は此の事件を異常な緊張を以て見まもっている)

verfolgen (追求する) という語を、時々刻々の成り行きを見まもる、という意味でよく用います。etwas mit Augen verfolgen と云えば、眼を以て追う、即ち眼を離さないで其の動きを見ていることです。

「緊張」は Spannung, Anspannung, その形容詞、副詞は gespannt, angespannt.

12. Es war eine Unbedachtsamkeit von mir, ihn damit zu betrauen. (あの男にこんな事を任せたのは私として甚だ輕卒であつた)

「輕卒」、「不慎重」という意の不注意は, unbedachtsam, unbedacht, unvorsichtig, unüberlegt, leichtsinnig, —「そそつかしい」ならば voreilig, überstürzt です。

von mir は「私として」です。Es ist sehr freundlich von Ihnen, mir beistehen zu wollen (私に御助力下さろうというのは、あなたとして寔に御親切なお志です), 「……として」ということは、日本語ではあまり云いませんが、ドイツ語や英語ではしきりに von mir,

von Ihnen (*of me, of you*) などということを云うのです。英語も *It is very kind of you*, です。

13. Deinen Lippen soll kein unbedachtes Wort entfahren.
(滅多なことを云つては不可ないぞ)

「口を滑らす」ことを「言葉が唇から飛び出す」(*Ein Wort entfährt den Lippen*) と云います。entfahren は前述の entgehen と同じく三格支配です。

14. Unsere Aufmerksamkeit wird oft durch äußere Dinge leicht abgelenkt. (吾人の注意はしばしば外界の事物によつて容易に横道に外らされる)

同時に、『或物に注意を向ける』(*die Aufmerksamkeit auf etwas lenken* または *richten*; *die Aufmerksamkeit einem Gegenstande zuwenden*) という句を記憶すること。

「外らす」という他動詞は ablenken ですが、「外れる」という自働詞は abschweifen と云います: *Seine Gedanken schweifen sehr oft vom Gegenstand der Betrachtung ab* (かれの考えはたびたび本問題から外れる)。

15. Er ist von dem Gegenstand seiner Betrachtung gänzlich eingenommen. (かれは、その考察の對象によつてすっかり注意を奪われている)

von……eingenommen sein は、『……のために注意を奪われている』ことです。題文を言い換えるならば *Seine Aufmerksamkeit ist von dem Gegenstande seiner Betrachtung gänzlich in Anspruch genommen* です。また fesseln (縛する) という動詞を使うと: *Der Gegenstand seiner Betrachtung fesselt seine Aufmerksamkeit gänzlich* あるいは *…… hält seine Aufmerksamkeit gänzlich gefesselt*.

16. Große Schlagzeilen springen aus den Spalten der Blätter heraus, fesseln das Auge des Lesers, nehmen sein Interesse für einige Minuten gefangen. (大きな見出しが新聞の欄から躍り出して読者の眼を縛し、それから数分の間かれの關心を捕えてしまう)

Schlagzeile は、標題 (*Aufschrift*) のみならず、内要の要點まで簡潔且つ強烈に要約した、所謂「みだし」です。Spalte は新聞の「欄」。

17. Ich habe einige Druckfehler übersehen. (私は二三の誤植を見落しました)

『見落す』(übersehen), 『聞き落す』(überhören), 『間を飛ばす』(überspringen) オミットする, 省く (übergehen) 等はすべて非分離動詞です。即ち *ge-* は不要: Ich habe die wichtigste Seite übersprungen (僕は一番大切な頁を飛ばしてしまつた), Mein Name wird übergangen (おれの名が落ちてゐる)。

英語の *overhear* とドイツ語の *überhören* とは, 意味から云つて正反對である點に注意! 英の *overhear* はむしろ「聞き落 (überhören) さないこと」, 即ち「片耳にはさむ」ことです。

18. Holla, vorgesehen! Man nichts umschmeißen! (おい, 気をつけろ! ひつくりかえしちや駄目だよ!)

Holla! は, 人を呼ぶ時の, 少しぞんざいな間投詞。vorgesehen! は *sieh dich vor!* で, *gib acht!* と同じ。Man は「人」という *man* ではなく, *mal* にあたる柏林辯で *nur* というのと同じです。